

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	水野 真理子
論文題目	日系アメリカ人の文学活動の歴史的変遷—1880年代から1980年代にかけて—		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本学位申請論文は、アメリカの西海岸を中心に1880年代から1980年代までの日系アメリカ人の文学活動の変遷を、日本とアメリカ、および在米日本人社会・日系アメリカ社会との関係に留意しつつ、作家や文芸人たちが経験した内面的葛藤に着目しながら辿り、文学という文化的産物が「移民」や「越境」という行為によってどのように変容し確立されるのかを明らかにするものである。</p> <p>全体は序論と第一部から第四部に分類された9つの章および結論から成る。申請者はまず序論において、「日系アメリカ文学」に関する先行研究においては、英語で書かれ出版された作品が中心に扱われ、作品解釈を主とするアプローチが主流であったことを述べている。そして、本論文の目的は、こうした先行研究の枠組みから踏み出し、日系アメリカ文学を「日系アメリカ人の文学活動の歴史」と捉えて、英語のみならず日本語で書かれた作品をも扱い、ジャーナリストおよび新聞や雑誌への寄稿者なども含めた広い意味での「文芸人」たちの文学活動全体を描くことであることを明確にする。</p> <p>第一部 (第一章・第二章) のねらいは、1880年代から1920年代半ばにかけて、在米日本人社会における文学活動が同時代の近代日本文学からの影響を受け、それらの文学的特徴を踏襲しようとする初期の方向性から離脱し、「移民地文芸」へとどう変化したのかを明らかにすることである。第一章では、1880年代から1910年代までの在米日本人社会の形成期の文学活動が、日本語新聞の文芸欄を中心とする活動や、日本の文壇との関わりを持つ永井荷風、アメリカ文学の世界へ切り込もうとするヨネ野口などの作家による活動に焦点を当てて概観されている。第二章では、1910年代から1920年代半ばまでの在米日本人社会で、日本語新聞の文芸欄を発表の場として活躍した作家の翁久允と彼の周辺の文芸人たちの文学活動が扱われる。翁たちが彼ら独自の移民地文芸を作り上げる過程や、その間にみられる文芸人たちの帰属意識をめぐる葛藤が詳細に述べられ、「移民地文芸」が「日本文学」に包摂されるのかどうかという問いも含めた一世世代の文学の帰属の曖昧さという特徴について論じられる。</p> <p>第二部 (第三章・第四章・第五章・第六章) のねらいは、1920年代半ばから太平洋戦争開始の1941年までの文学活動の状況を、日本語による活動と英語による活動の混在期として描き、一世と二世の世代間のつながりや日本語と英語の活動の相互関係、また二世独自の文学を求める動きとアメリカ主流社会における文学との関連について明確にすることである。第三章では、1920年代半ばから日本語新聞に詩を発表し頭角を現し、同時に英語による詩作も行った加川文一の文学活動が扱われる。彼は1930年代には一世・帰米二世を中心とする日本語の文学活動と、二世を中心とする英語の文学活動とを統合しようとする架け橋的役割を担っていたと指摘される。第四章では、一世と二世、日本語の文学活動と英語の文学活動の統合を目指した文芸雑誌『収穫』を題材に、1930年代から太平洋戦争開始まで一世世代から二世世代への世代交代が徐々に進む中で、一世たちが自分たちの文学をどう捉え、成長していく二世の文芸人たちに何を託したのかという問題が考察される。第五章では、在米日本人社会だけではなくアメリカの白人主流社会へ向けて発信することを試み、ルイス・アダミックらマイノリティ作家との交流を持ちつつ、二世独自の文学・文化創出を目指した雑誌『カレントライフ』が取り上げられ、雑誌に積極的に関わった二世の文芸人たちが掲げたアメリカニズムの理想や二世の文学・</p>			

文化がどのようなものだったのかが詳述される。第六章では、二世作家のパイオニア的存在であるトシオ・モリの1930年代における活動に焦点が当てられ、アメリカ主流社会に通用する文芸雑誌に作品を発表し、またアメリカの新進作家ウィリアム・サロイヤンとも親交のあったモリの目指した文学が、当時カリフォルニアで芽生えていたマイノリティ作家による文学活動との関連の中で論じられる。

第三部（第七章・八章）のねらいは、太平洋戦争中の日系人強制収容所における文学活動について、忠誠を選択した二世の英語による文学活動と不忠誠を選択した一世、帰米二世による日本語の文学活動との二つの側面から考察し、強制収容という事態が文学活動に与えた影響について考察することである。第七章ではトパーズ収容所における英語雑誌『トレック』『オールアボード』に焦点が当てられ、中心的寄稿者だった二世の詩人トヨ・スエモトとトシオ・モリの文学活動を例に、「アメリカ化」することを求められた文芸人たちの心の葛藤が描かれる。第八章では、不忠誠を選択して日本帰国を想定していた一世および帰米二世が、トゥーリレイク収容所で創刊した日本語文芸雑誌『鉄柵』が扱われている。本章では、同人たちが在米日本人から日本の「日本人」となっていくと試みる過程、そこでの雑誌の役割、また中心メンバーの加川文一、帰米二世の山城正雄の文学活動に表れる内面的葛藤が詳しく描かれている。

第四部（第九章）では、戦後の日本語による文学活動と英語による文学活動の状況が、1960年代末から1970年代にかけてのアジア系アメリカ人運動、および1980年代に成功を収める日系人強制収容補償請求運動という歴史的な文脈において概観される。ここでは、主流社会に対して自らのアイデンティティを主張するアジア系アメリカ人の活動が引き金となって、アジア系アメリカ文学および日系アメリカ文学が、アメリカ文学の一部として認知されるようになった経過や、様々な日系アメリカ人の立場の差異や強制収容期に表明した忠誠・不忠誠の選択が文学活動に与えた影響が考察される。

結論では、本論で辿ってきた日系人の文学活動の変遷が整理され、日本語から英語による文学活動の流れと日本語によって継承されていく活動の流れが示される。そして、日本語の文学活動と英語による文学活動、あるいは世代間の関連性、日系人の文学活動の重要な特徴として捉えられる日本語の文学活動の有する意義について述べられ、文学活動の歴史的変遷を辿るという、文学研究における新たな視点の可能性が提示される。

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文は、日系アメリカ人の文学活動の変遷を時系列に沿って跡付けたもので、1880年代から1980年代までの百年という長い時間枠を取りながら、歴史と文学との接点を、激動の歴史の渦中に置かれた文芸人の内面の葛藤に視座を据えて切り取るようとした独自性のある論文である。文学研究の分野では、これまで第二次世界大戦後に英語で書かれた日系アメリカ文学に関しては、日米の研究者によって多く論じられてきたが、日系移民社会の初期の頃から戦間期における日本語あるいは英語による文学活動については十分に扱われてこなかった。また、歴史研究の分野では、どちらかといえば周縁的な立場にいた日系知識人、文芸人についての研究は比較的少なかった。こうした、文学および歴史研究の中で見落とされてきた一群の日系文芸人の活動を、彼らによって創刊された一連の文芸雑誌、彼らの創作および議論の場となった日系新聞に掲載された膨大な数の記事や作品の詳細な内容分析を通じて、実証的に描き出したところに、本論文の強みがある。日米の史料を広く渉猟した本論文は、日系アメリカ人の文学およびその背景にある彼らの社会的・政治的体験の理解に関して先行研究にない新しい視座を提供するものである。

三部構成の本論文の序論では、日系アメリカ文学に関する先行研究の諸傾向をまとめながら、申請者の方法論が明解に述べられている。すなわち、申請者は、これまで言語的相違から別々に論じられる傾向のあった日系アメリカ人による日本語文学と英語文学との境界を取り除き、両者を総合的また連続的に捉えようとする。さらに申請者は、主要な作品や作家あるいは文学潮流の集積としての公式の文学史からこぼれ落ちたマイナーな作家やジャーナリストに注目し、彼らが新聞や雑誌の編集者や読者と作り出した言語空間を再構成しようという新しい方法論を編み出している。

在米日本人社会における文学活動が、同時代の近代日本文学の影響と模倣から離脱して独自の「移民地文芸」に踏み出そうとする時期を描いた第一部で特筆すべきは、翁久允を中心とする文芸人が、自分たちの帰属、アイデンティティをめぐって曖昧で複雑な意識をもっていたことを、豊富な史料を使って指摘し、その内面の葛藤に肉迫しようとしていることである。特に全体でもかなりの部分を占める第二章は、翁久允が在米中に出身地の富山の地方紙に寄稿したこれまで未発見の史料を駆使して、在米日本人の雑誌や新聞に寄せられた翁の見解と、地元地方紙の読者に向けた「想い」との間の落差や、移民地の文芸人と労働者との階級的差異や意識の相違などにも着目する興味深い章である。

移民法改正により日本人移民が禁止された1924年から太平洋戦争開始の1941年までの文学活動を描いた第二部は、この時期を日本語による活動と英語による活動の混在期として捉え、文芸雑誌や新聞における英語欄の新設、トシオ・モリなどの二世作家とアルメニア系作家サロイヤンや旧ユーゴスラヴィア出身のルイス・アダミックとの交流などに注目している点で、先行研究にはない新しさをもっている。また、呼び寄せ一世の加川文一が苦労して英語を習得し、新批評の中心人物の一人となるアイヴァ・ウィンターズの助力を得て英詩集を出版し、両者の文通は強制収容所時代にも続いたという興味深いエピソードを、二人の間の書簡から描いている箇所は、知られざる日米文芸人の交流史として貴重なものである。さらに第二部は、日系文芸人が限られた日本語空間からより「広い世界」へと飛躍し、言語的越境を試みた時期が戦前にもあったことを証明するものであり、多文化的な環境のなかで新しい方向性を模索していた一群の文芸人の存在は、アメリカ化か日本のナショナリズムへの回帰かという二元論的議論に風穴をあけるものでもあろう。

太平洋戦争中の日系人強制収容所における文学活動を、忠誠を選択した二世の英語

による文学活動と、不忠誠を選択した一世および帰米二世による日本語の活動という二つの側面から分析した第三部は、トパーズ収容所で発行された二つの英語雑誌と、トゥーレイク収容所の日本語文芸雑誌の詳細な分析から、忠誠か不忠誠かという境界を越えた収容者に共通する「やり切れない」思いやアンビバレントな心情に迫っている点で、申請者の研究対象への共感が強く感じられるものである。強制収容という事態が文芸人の内面に与えた影響を跡付けた第三部は、多文化的な環境から生まれた文学的「収穫」が花開こうとする第二部の楽観的なトーンとは対照的に暗い色調で描かれ、それは叙述される悲劇的時代にふさわしいといえる。

最後の第四部では、やや駆け足で、第二次世界大戦後の日系人の文学活動が概観されている。アジア系アメリカ人運動のいわば余波として主流社会に認知されるようになったアジア系アメリカ文学の一部として、日系アメリカ文学が「発見」されたこと、その際、戦前の二つの流れのうち日本語による活動はその視野から見えなくなっていたことが明らかにされる。しかし申請者は、「不忠誠組」を中心とした文芸人が戦後アメリカに移民した日本人を巻き込みながら、細々と日本語による文芸活動を継続して現在に到っているということにも注目し、母語から移民先の言語による文芸活動に移行していくという、他のエスニックグループの常道から外れた例外的なケースである可能性を示唆する。こうした二つの流れが生じたのは、どの言語を選ぶかという文学者の個人的選択の問題もあるとしながら、同時に排日移民法や戦争中の強制収容といった歴史的な要因があったことを詳しく論じている点は、歴史的状況と文学的営為との複雑で入り組んだ関係を示唆して興味深い。

このように本論文は、日系アメリカ人の文学活動の変遷を、文学・文化研究、歴史学、知識人論などの知見を用いて幅広く論じたものであり、とかくアメリカ化か日本への忠誠かという二元論でとりあげられやすい日系人の軌跡をその心理的および情緒的側面に踏み込み、きめ細かく分析することで、日系アメリカ人社会の多様性およびそこでの文学活動の諸相を複眼的な視点から俯瞰した秀作である。その論理の展開は明解であり、文章も滑らかで申請者の豊かな感受性に彩られている。

その一方で、西海岸の日系人コミュニティ、さらにその中でも文芸人に焦点を置いた本論文では、1920年代から30年代にかけて日本を逃れてアメリカに「亡命」の地を求めた日本の社会主義者や芸術家、また東海岸や中西部に移住した日本人、あるいは文芸人とは関係を持たなかった労働者などが視野に入っていない。そうした多様性にも今後目配りをするのが求められる。また、移民地社会の出来事が詳細に語られている一方で、それらと、同時代にアメリカで起こっていた様々な歴史的イベントや文化・思想潮流との関連については、深い考察に到っていない面もある。また、個々の文学作品の分析においても、さらなる深い読みが求められる。しかし、本論文はそうした欠点を補ってあまりある新鮮な着眼点に満ちており、日系アメリカ人の文芸活動を二つの言語による活動を含むものとして総合的また連続的に捉えることができている点で、今後のこの分野の研究に貢献するものである。

以上のことから、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成23年10月27日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降